

キャンパス通信 ippeki



- 01 特集／
短期留学生とともに
災害について学んで
- 03 学部／
1年生による座談会
- 05 大学院／
上田奨学会50周年
記念事業を開催しました
- 07 講義・教員紹介
- 08 学外活動
- 09 第8回 国際フォーラム
- 10 ひとりを見る目、その目を世界へ

令和元年度 大学院修了式 (9月26日)

第 17 号
2019.4 ▶ 2019.9



今秋は、2名の大学院生が修士(看護学)/(保健学)の学位を授与されました。

ひとりを見る目、その目を世界へ

 日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

短期留学生とともに 災害について学んで

将来、国際協力・協働の分野における日本の看護職のリーダーとして、変容するグローバル社会・多文化共生社会に貢献できる人材育成を目的とした国際看護コースでは、4年生の前期に「赤十字活動Ⅱ」を履修します。この講義科目は、国際看護コースとして最後の科目となります。

「赤十字活動Ⅱ」では、7月3日から7月23日までアイルランガ大学 (Airlangga, インドネシア) から3名 (うち1名は教員)、ラ・ソース大学 (La Source, スイス) から2名の学生を迎え、本学の国際看護コースの4年生とともに災害について学びました。ラ・ソース大学からの交換留学生は、今回初めて受け入れました。

研修テーマ

各国の災害発生状況や災害対策を学び、
静穏期に私たちができることは何か

研修スケジュール

7月	月	火	水	木	金	土	日
第1週	1	2 ラ・ソース大学より 学生到着	3 アイルランガ大学より 学生・教員到着 Welcomeランチ 講義「災害看護概論」	4 テーマディスカッション 1,2	5 高齢者体験 英語Ⅲの講義に参加 国際ボランティア学生 主催の文化交流会	6 長崎県を訪問 (原爆資料館、平和 公園を訪れる)	7 太宰府天満宮を訪問 (七夕の行事に参加)
第2週	8 福岡赤十字病院 (施設見学・オリエン テーション)	9 福岡赤十字病院 (見学実習)	10 地区踏査	11 大島診療所、ふれあい センター(見学実習)	12 地区踏査	13 ラ・ソース大学の 学生が広島を訪問 (原爆ドームを訪れる)	14 アイルランガ大学の 学生・教員帰国 本学のオープン キャンパスに参加
2グループに分かれて活動							
第3週	15 大島へ移動 京都工芸繊維大学 大学院の学生と合流	16 大島防災ワークショップ に参加	17	18	19	20 台風接近のため切り上げる	21
第4週	22 プログラムの振り返り プレゼンテーション 準備	23 最 終 プレゼンテーション	24 ラ・ソース大学の 学生帰国	25	26	27	28



研修のテーマである「災害」だけでなく、学ぶ者としての姿勢も学んだ3週間でした。日本に滞在中に留学生は、看護以外にも言葉や文化、考えなど様々なものにも興味を持って積極的に質問をし、実際に興味をもった場に足を運ぶなどして、多くの事柄を吸収していました。この研修中に、このような留学生の姿を何度も見る機会がありました。看護職者として学習を継続していく上で、様々なものにも興味を持ち吸収していく姿勢は大事であり、人として成長することに繋がるため、私も彼らの姿勢を見習いたいと思いました。また留学生とともに過ごしたことで、災害に対するお互いの考え方が見えてきました。グローバル化が進む現在、日本も多文化社会となってきており、私たちはどのような場によいと、お互いの考えを尊重しながら活動していかなければならないと感じました。今回の研修の災害というテーマを通して、多角的な視点を持つ必要性和同時に、自ら学んでいく姿勢の大事さも分かりました。この経験を看護の場に限らず、多くの場で活用していきたいです。

国際看護コース4年 大字 菜々子

今回の研修では「災害」をテーマにインドネシア、スイスの学生とともに学びを深めていきました。ディスカッションでは各国の災害や災害対策の現状を知り、大島では外国人観光客の目線から避難を考えるワークショップも行いました。この研修を通して、災害による被害を最小限にするためには安全な環境を整えるだけでなく、自助、共助を高める必要があり、周囲の人々との関わりの中で培われた絆が災害時に命を守ることに繋がると学ばれました。また、留学生との交流を通して、現状に満足せず、世界の様々なことに興味を持ち、多くのことを学んでいかなければならないことも実感しました。

今回の研修をもって国際看護コースの活動は終了となります。これまでベトナムやスイス、そして大島で研修を行い、様々な経験を通してより充実した大学生活を送ることができたと思っています。今後は、それぞれの目標に向かって本コースでの学びを活かし、日々精進していきたいです。

国際看護コース4年 久枝 綾音



研修を通して、災害が発生した際にどうするかではなく、訓練や物品の備蓄、避難情報の共有など静穏期の過ごし方が、災害による被害を少しでも減らすために重要であることが理解できました。また、高齢者や子供、障害を持つ人々など、どんな人でも同様に避難できるよう日頃からアセスメントを行い、支援に繋げていくことが看護師の役割ではないかと考えました。対象者との関わりを通して、蓄積されるアセスメント力が静穏期での災害に対する視点として重要であり、日々の業務の中でそれを高めることが防災へと繋がっていくと考えられます。

このプログラムが国際コースとして最後の研修となりましたが、様々な経験を積み、看護の視野を広げることができました。この経験を活かして、疾患だけでなく生活背景等対象者自身に対して支援していくことができる看護師になりたいと考えています。

国際看護コース4年 森 駿哉

「災害」をテーマにした今回の研修は、まずディスカッションで各国の災害や災害対策について知り、次にハザードマップを用いながら大学周辺を歩くことで、土砂崩れ等の危険性がある場所や指定避難場所を確認し、留学生と災害時の危険性や必要な支援を考えることができました。その学びは離島での避難シミュレーションでも活き、島内の現状把握と課題の考察に繋がったと思います。本研修のプログラムを通して、災害時の被害を最小限に抑え命を守るためには、集団及び個人の共助と自助を高めることが重要であることを学びました。災害大国である日本は、今日まであらゆる自然災害を経験し、復興してきました。その経験を今後起き得る南海トラフ地震や首都直下地震などに繋げていかなければならないと思いました。私は、今回の研修で災害救護に携わる看護師になりたいとより一層思い、春から看護師として新たな1歩を踏み出すためにも日々精進していきたいです。

国際看護コース4年 佐々木 彰子

今回の研修でインドネシア、スイス、日本の災害対策について知り、その対策の認知度や災害に対する住民の意識の差があることが分かりました。「自分は大丈夫」と考えている人は多く、私も災害が身近で実際に起きた時、どのように行動するか具体的なことは考えていないことに気付きました。静穏期には過去の災害を振り返り、次の災害に向けた対策が必要であることを学んだことで、今がその時であり、まずは住んでいる地域のハザードマップを確認する必要があると思いました。また、大島では高齢者が毎朝主催しているラジオ体操に参加しました。運動習慣をつけて、健康を維持することは、発災時の自力での避難につながります。看護者には、高齢者の健康を維持、向上する介入を行い、疾病の予防、自助の強化につなげる役割があるとも考えました。

今回の研修やこれまでの国際看護コースでの学びを残りの学生生活や来春からの臨床での学びに活かしていきたいです。

国際看護コース4年 松本 由梨絵

Thank you for welcoming us in your college and particularly for the party. We were glad to try the traditional clothes, watch Okinawa traditional drums and play the watermelon game. We learned a lot about disaster management and the nurse's role in these situations. We are grateful to have the opportunity to learn from the teacher's experiences on the field. We also want to say thank you to the students for guiding us and supporting us during all this program. Thank you for your generosity, we left Japan the head full of great memories.

ありがとうございました We are waiting for you to come in Switzerland !

ラ・ソース大学 Tara Kappeler & Alexis Heubi



ラ・ソース大学 Alexis Heubiさん

国際看護コース4年 松本 由梨絵さん

ラ・ソース大学 Tara Kappelerさん

国際看護コース4年 森 駿哉さん

国際看護コース4年 佐々木 彰子さん

国際看護コース4年 久枝 綾音さん

国際看護コース4年 大学 菜々子さん

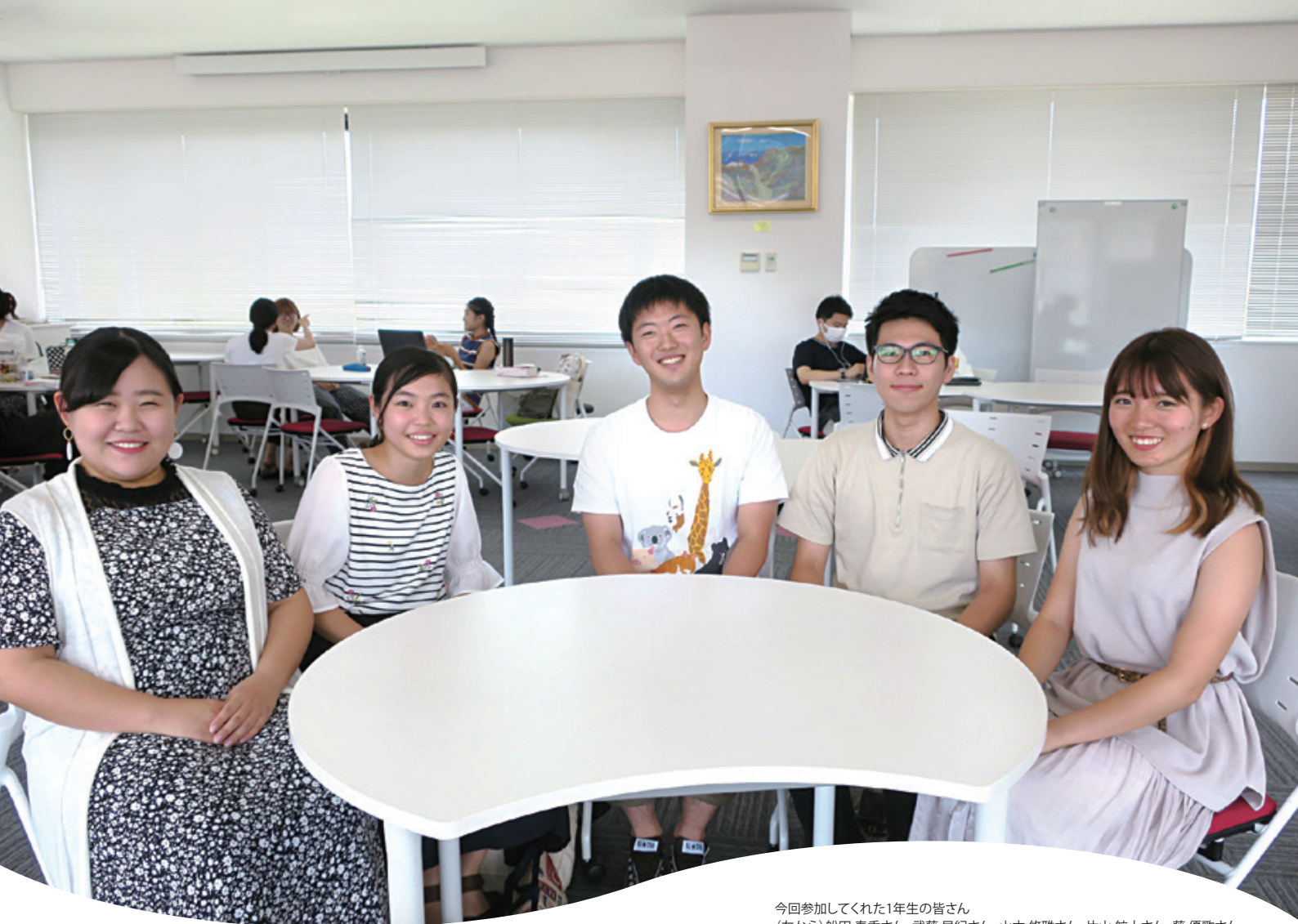
国際看護コース担当 小川教授

守山特任教授

田村学長

中村学部長

国際看護コース担当 宇都宮助教



今回参加してくれた1年生の皆さん
 (左から) 船田 春香さん、武藤 早紀さん、山本 悠雅さん、片山 航大さん、藤 優歌さん



入学してから前期を終えて——

1年生による座談会

4月に1年生が入学してから前期が終了しました。高校と大学では学ぶ内容が大きく変わります。そのような変化を1年生はどのように感じ、どのような壁にぶつかっているのでしょうか。また、これからその壁をどのように乗り越え、進んでいこうと考えているのでしょうか。今回は、5名の学生との座談会を通して、それぞれの思いをうかがってみました。

——入学当初はどのような気持ちをしていましたか？

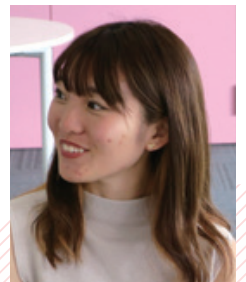
片山：僕は災害というところが一番気になって。東日本大震災などをテレビで実際に見て、人を救うために自分が何か技術を持ちたいと思って、その時に日赤があり、そこで実際に学んでみたいと思った。この大学を選んで、もっと学びたいと思っています。



片山 航大さん

藤：看護師になろうと思ったのが高校3年生の後半で、とりえず何か人のためになりたいというのを探していた時に、偶然この大学のオープンキャンパスで体験授業を受けた

んです。その時に、映像を使った講義だったんですけど、これはすごい分かりやすいと思って、意欲が高まったんですね。ここだったら自分のなりたいものを見つけたり、自分の将来についてしっかり考えられるんじゃないかなと思った。



藤 優歌さん

山本：看護師になりたいと思ったのが高校2年生の時に、その時にどんな看護師になりたいかって考えたときに、世界の貧しい地域の方を救える看護師になりたいなと思って。その時ちょうど、この大学の国際看護コースのことを知って、そ

この目指して頑張ろうと思いました。入学したからには、勉強を頑張っていきたい。

武藤：看護師になろうと思ったのは、世界の状況を見て、格差をなくしたいと思ったんです。格差をなくすには、健康であってこそ経済とかが発展していくなと思ったので、まずその健康を支えたいと思って。赤十字が国際活動をすごくやっていたので、赤十字に興味をもって、この大学に入ろうと思い、入学しました。



武藤 早紀さん

船田：同じ高校の人がひとりもなくて、友達出来るかなとか、だれかと仲良くなって看護師になるために勉強しっかり頑張れるかなとか不安はありました。

——前期が終わってみて、今何を思いますか？
講義は高校と違う？

全員：(進むのが) 早い・・・

藤：ほかの大学よりも専門的だから、より(勉強)しないといけないし、スピードも速いし・・・

山本：赤十字の科目とか(他大学の)友達にいても「何それ」とか言われるし。

藤：(人体の構造と機能といった科目は) 今まで触れたことのない分野だから、一から頭に入れないといけない。

船田：大事なことが多くて。

片山：テキストの1ページに太字が多くて。



山本 悠雅さん

——9月末からは後期が始まりますが、
目標や不安に思うことはありますか？

片山：新しい人たち(看護師さんや患者さん)とふれあうので、うまく溶け込めるかということが不安。

山本：テストが終わって安心感はあるが、これからが本番だと思うので、勉強頑張っていきたい。(夏休みは)九州大学病院で無料見学ができるので、看護師を目指す友達と一緒にいきたいと思っています！

藤：前期にレポート提出などで結構切羽詰まって、内容がまともなくて、とりあえずという感じだったので…。この日までに提出ですと言われた日に提出できるくらいの勢いでやっていきたい。それと、予習を徹底したいなと思っていて、講義を受けて復習はしていたが、予習はしていなかったんで、自分がどの分野について学んでいるのかわからなくて…。テスト前にやっとなるほどとなるが多かったんで、それをひとつひとつの授業で実感していきたいです。

片山：前期の間、自分の中で勉強のペースが分からなかったけど、大体つかみかけてきたので、もっとちゃんと勉強して、ペースをつかみたい。それで、しっかり楽しむところはちゃんと楽しんでいきたいなって考えています！(笑)

武藤：もうちょっと色んな人と関わっていききたいなと思ったので、ボランティアとかにも参加したい。それから、本もいっぱい読んで自分の価値観を広げて、色んなものを色んな視野で見られるようになりたいなと思っています。



船田 春香さん

船田：虐待をしてしまう家族について興味を持っているので、それについての本を読んで、こういうことが起こっているのかと理解したり、この大学に入学したのが災害看護を詳しくやっている日赤の大学だから来たので、災害看護でこういうことが大事という本を読めたら読んだりしてみたいと思っています！

スクールカウンセラーの

ひと言アドバイス



スクールカウンセラー
上瀧 純一 先生
(臨床心理士)

学生の悩み

「初めて実習に参加します。新しい人たち(看護師さんや患者さん)とふれあうので、うまく溶け込めるかということが不安です。」

アドバイス

人は、初めてのことに挑戦する時、「うまくやれるだろうか」と不安を感じ、緊張するものです。また、人は適度な緊張を感じている時の方が、集中力が高まり、自分の持っている本来の力を発揮できるものです。だから、初実習前の不安や緊張は、当たり前のことですし、必要なことなのかもしれません。

不安を感じている自分をネガティブに捉えず、「新しいことに挑戦をしているんだ!」、とポジティブに捉えてみてはどうでしょう。それには、「ポジティブに考えなきゃ!」と頭で考えるのではなく、深呼吸やストレッチをして、不安な気持ちで必要以上に緊張している表情や身体をほぐすことに意識を向ける方が、力が抜けて、程よい緊張感を保ちつつ、前向きな気持ちになれるものです。

実習前に不安でネガティブな気持ちになっていると感じたら、空を見上げて深呼吸、そして笑顔を意識してみてください。それだけでも、気持ちが切り替わることがあるかもしれませんよ。



上田奨学会50周年 記念事業を開催しました

昨年、上田奨学会は設立50周年を迎えるとともに、本学大学院生への奨学金事業も10年を迎えました。そこで、上田奨学会と本学が、同じ志の下、今後も看護師養成に尽力し、互いにさらなる発展を遂げていくことを目的とした50周年記念事業として大学院生によるプレゼンテーション大会およびピアノコンサートを開催しました。(2019.7.5)

上田奨学会とは

上田奨学会は、福岡赤十字高等看護学院(福岡赤十字看護専門学校の前身)で看護を学ぶ学生を支援するため、上田理事長の御祖父様である故上田米蔵氏の篤志により昭和43年に設立され、平成20年度からは、本学大学院生を対象とした奨学金事業も開始されました。



上田奨学会
理事長 上田 康蔵氏

大学院生によるプレゼンテーション大会

テーマ **なぜ、わたしは大学院生になったのか？** ~きっかけとなったこと(ある人・ある言葉)~

最優秀賞

私が大学院生になったきっかけは3つあります。

まず1つめは指導教員でもある本田先生の存在です。看護師になってちょうど10年が経ち、これからの自分の将来を模索し、キャリア中期の停滞時期に陥っていた私に大学院への進学を勧めてくださったのが本田先生です。今振り返ると、先生が「あなたが考えていること、面白いじゃない!」とってくれた言葉が私の動機づけとなり、今の原動力になっているのだと実感しています。10年ぶりに大学へ戻り、これまでの経験を意味づける作業は、容易ではないことも多いですが、さらなるレベルアップを目指して研鑽を積んでいきたいと思えます。

次に、今一緒に働いている仲間の存在です。仲間と過ごし、日々看護について悩みながらも面白さややりがいを感じることが私の支えとなっています。最近、私が実地指導者として育ててきた後輩が新しく入ってきた新人看護師を指導している姿を見て、嬉しさを感じると同時に後輩の成長が私にとっての喜びや満足感につながっているのだということに気づきました。部署の中堅看護師としてリーダーシップを発揮するなかで、集団としていかに学びを高め合い看護の力を磨いていくかということがいまの私の研究に対する大きなテーマです。その大きな問いを胸に秘めつつ、これから働きながら学習を積み、実践のなかで熟考を重ねていきたいと思っています。

最後に、両親の存在です。両親は私が大学院へ進学を決めるとき、私の考えを支持し「頑張りなさい」と背中を押してくれました。特に母はこれまでに会った数々の上司よりも私に対して一番厳しい人で、弱音を吐いてもその倍で撥ね退けられます。しかし、共働きで厳しい社会を経験している両親だからこそ、学び続けることの大切さを教え、厳しくも一番の理解者になってくれているのだと感じています。

(修士課程 看護コース 1年生 原 綾花)



私は小学生の時にモンゴルのストリートチルドレン支援をしており、幼い時から途上国の支援が身近なものでした。将来は途上国の支援に携わる仕事がしたいと思い、大学では英語や国際関係について学んでいましたが、当時は途上国の支援といっても具体性はなく、どの方面からアプローチするか考えている最中でした。そんな時、母子保健を専門とする三砂ちづる教授の授業で、日本の助産師がいかに世界的にハイレベルで、女性に寄り添ったケアを行っているかを学び、薬や医療処置に頼ることのない日本ならではの自然なお産や健康支援方法を途上国に広めたいと思うようになり、助産師を目指すことにしました。

助産師になるために、まずは地元福岡の看護大学に再入学し、看護師の資格を取得しました。しかし、看護大学では助産師の資格を取得することができなかったため、さらに進学する必要がありました。もともと進学するなら「大学院に行きたい」という漠然とした思いはありましたが、実際に進学先として大学院を選んだ理由は、高度で専門的な技術を持つだけの助産師ではなく、研究能力も持つ助産師になりたいと思ったからです。

私は、研究はより良い社会を作るためにあるものだと考えています。大学院で国内外の研究を通して、社会の役に立つ研究ができる力を養い、最終的には実践方法も研究能力もある助産師になりたいと思います。

(修士課程 助産教育コース 1年生 石橋 慶子)



なぜ、私は大学院生になったのか。それは、「日本の精神科医療を変えたい!」との思いからです。

看護師になって20数年の経験の中で、患者、家族、色んな方々と出会ってきましたが、経験を積む中で精神科医療に対して、「何故、こんなにも長く入院しているのか」「管理ばかりされているのか」「本人の主体はないのか」など沢山の疑問が出てくるようになりました。そこで、学生時代に「日本の精神科医療は欧米に比べ4、50年遅れている」と言われていたことを思い出し、他国の精神科医療を調べ、実際にイタリアの精神科医療視察にも行きました。

イタリアでは人口10万人に対し、精神科のベッド数は15床を限度とし、平均在院日数も10日前後と短く、地域で自分らしく、責任や役割を持ちながら、自由に生活をされていました。地域でのコミュニティがしっかりとし、当事者の権利が守られながらも、責任を持ちながら、日常生活を送られていることが当たり前に行われていることに驚愕しました。イタリアで見たものは、当たり前のことなのかもしれません。しかし、この当たり前のことが日本ではできていません。ヒエラルキーが強い、この日本の現状を変えない限りダメだと感じながら帰国しました。

帰国後は、地域に向けた情報発信など私にできることをやっていますが、もっと学び、自分の思いや考えをきちんとした形で世間に伝えていくには学ぶしかない!そして、自分の思いを言語化できる人間になって日本の精神科医療に変革を起こしたいと強く思い、一念発起して大学院への進学を決めました。

(修士課程 看護コース 1年生 村尾 眞治)



大学院進学の大きなきっかけとなったのは、大学4年次の不妊治療施設での専門強化実習です。その実習の中で長期的に治療や検査を行っているご夫婦の精神的・身体的な疲労や、流産経験のある女性の妊娠・出産に対する不安や恐怖について目の当たりにしました。そこで感じたのは、健康に問題を持つ女性には治療や検査における看護援助も必要であるが、子どもを授かるまでの過程をサポートする心理的な面を考慮した援助が必要ではないのかということでした。この実習体験から、助産師や看護師など、女性の生涯の健康の向上に携わる専門職者は、女性の背後にある心理的要因に敏感であること、さらにそれを含む精神的支援を行うことが必要であると考え、女性の周産期におけるメンタル面での支援に関して自分自身の知識や能力を深めたいという思いにかられました。

もう一つのきっかけは、大学での母性看護学実習です。実習初日に初めて分娩介助に入らせてもらった時、先生から「あなたが傍にいて心強かったと思うよ。助産師に向いていると思う。」と言われました。その時、自分は助産師になり、少しでも周産期における女性の力になりたいという気持ちが一層強くなりました。そして、そのためには助産技術だけではなく、ウイメンズヘルスや女性の健康増進に向けた幅広い分野の知識を得る必要があると考えました。

将来、臨床現場で働きながら、精神面でのサポートも含めた支援を提供できるような助産師になるために、自分自身が知りたい分野や疑問に対して追求する場として、大学院という環境が最も理想的であると考え、大学院へ進学しました。

(修士課程 助産教育コース 2年生 大上 桃花)



ピアノコンサート

ピアノ伴奏: 上田 聖子様(上田理事長の御令姉様)

九州大谷短期大学演劇放送フィールドの教授で、同大学の卒業生の歌とともに「僕こそミュージック」などのミュージカル曲目から「未来予想図」など全6曲を演奏してくださいました。

※レストランアスティに設置されているピアノは、上田理事長の御尊父様である尊之助氏から、先代の意思を引き継ぎ、福岡赤十字高等看護学院開校に合わせ、寄贈いただいたものです。平成24年に看護学生の情操教育に活かすべく、本学に移設していただきました。



人体の構造と機能を 学ぶということ

ヒトが生きるための正常な状態を知り、「間違い探し」をしよう!!

人体の構造と機能は、解剖学(ヒトの体のつくり:構造)と生理学(ヒトの体の中で起きている現象:機能)の分野に分けられ、医学の基本となる知識を養うための学問です。

正常な状態を理解することで、病気の状態になったときにどのような構造や生体反応が障害を受けているのか、障害を緩和するためにどのような作用のある薬が使われ、どのような効果のある治療が行われるのか、ということへの理解にもつながります。さらに患者個々にあった看護を導き出し、実践していくことにもつながります。



担当教員にインタビュー

今年度から本学で「人体の構造と機能」の講義を担当している木村涼平先生にインタビューしました。

Q 小さい時の夢を教えてください。

A 小さい時はスポーツをやっていたこともあって整形外科医になりたかったです。それから、中学の理科の先生が面白い先生で、理科の教員にもなりたいて思っていました。

Q どうして解剖学を選ばれたのですか？

A 大学時代のゼミの担当教員が解剖学の先生で。当時は、看護の世界でなぜそれをするのかというエビデンス(根拠)が曖昧なものが多かったです。例えば、静脈血採血で、血管に上手く針が刺さらず採血できないときは、針を刺したまま針を動かして血管を探る行為がありました。今では神経障害を起こす危険性があるため実施していません。このように、エビデンスは大事で、それを明確にするよう大学のころから求められてきました。病院実習に行っても臨床の看護師は、解剖をあまり知らないのではと感じたため、ゼミの先生の誘いにもせられて解剖の道に進むことにしました。

Q 教員の道に進まれたきっかけは？

A 大学の時に知り合った教員に「修士号を持っているなら、教員をやらない」と言われて。看護師の免許を持ち、かつ解剖を教えられることは、すごく学生の役に立つといわれて教員になりました。

Q 学生に人体の構造と機能を教える上で難しいことは？

A 高校を卒業してすぐに学び始めますが、急に言葉が難しくなる。特に人間の体の中についている名前は漢字も難しく、読み方も分からないようなものも多い。学生は、外国語を学ぶような感覚になるため、日本語が日本語として通じないことが一番難しい。実際にモノを見たこのない学生たちに、どうやって言葉だけで伝えていくかを考えなければならぬところにすごく頭を使います。本学では、映像コンテンツが入っているため、なるべく立体的に見せるようにしています。

本学の「人体の構造と機能」の講義では、木村助教が吉永特任教授と分担しながら、人体の構造や機能の話だけではなく、看護の実践につながるよう、人体の構造と機能がどのように看護に結びついているのか、薬や治療に活かされているのか、病気の状態ではどのようにヒトの体の構造や、生体反応が変化しているのかを教授しています。



リベラルアーツ・専門基礎分野

助教 **木村 涼平**

略歴

- H19年 熊本保健科学大学保健科学部看護学科 卒業
学士(看護学)、看護師・保健師免許取得
- H21年 熊本大学大学院医学教育部医科学専攻
形態構築学分野 修了 修士(医科学)
修了後、民間企業に5年勤め、労働保健衛生業務等に従事
- H26年 純真学園大学保健医療学部看護学科助手
- H27年 同 助教
人体の構造と機能の科目責任者、国家試験対策における
人体の構造と機能、病態生理学等の講義を担当
- H30年 同 講師
日本赤十字九州国際看護大学病態生理学非常勤講師
国立病院機構九州医療センター臨床客員研究員
- H31年 日本赤十字九州国際看護大学
リベラルアーツ・専門基礎分野助教
国立病院機構九州医療センター臨床客員研究員



地域の方々とのふれあいを通して

サークルオブピア

2019年8月4日(日)
「寺子屋イン泉ヶ丘1丁目」での
ボランティア

活動内容／地域の小学生の宿題の手伝い、味噌玉づくり、
カレー作り

この活動には、未就学の子どもから高齢の方まで参加しており、普段あまり関わらない年代の人とも関わることができました。参加者と一緒に話しながら活動するのは、とても楽しく、有意義な時間でした。ここで経験したコミュニケーションは、必ず自分の力になり、看護師になってからも活かしていけると思っています。今後も様々な活動を通して、多くの人と交流していきたいです。

地域と関わると、
様々な世代の人と
コミュニケーションがとれた



その経験が、
自分の力になっている

ゆいまーるのわ

2019年8月3日(土)
「宗像病院お元気クラブ」

活動内容／沖縄の伝統芸能 エイサーの披露

私たちは、宗像地区を中心とし、地域のお祭りや、病院、老人ホーム、小学校、幼稚園等の施設でエイサーを披露しています。

実際に地域の方々の前で演奏をすると、「毎年エイサーを観るのを楽しみにしている。」「あなたたちを観ると元気になる。」「来年も来て欲しい。」等の声かけや、感動して涙を流される方もいらっしゃいます。そのような方々に出会うと、このサークルに入ってよかったなと感じます。また、私たち学生のエイサー演奏による元気な姿を見ていただくことが、地域の方々の元気に繋がったり、楽しみになったりしていることは、やりがいにも繋がりが頑張りと思う活力になっています。

楽しさを共有して、地域の方々との関わり大切さがわかった



演奏を聴いて、激励を下さる方や
涙を流して下さる方がいること
それが私達の活動の源となっている

地域コミュニティの活性化は重要
将来、看護師という専門性を活かして、
地域づくりに関わってきたい



学生のマナー向上を目指して

学生自治会

学生自治会は、2年生20名、1年生55名を中心に活動しています。主な活動として、学生が主体となり学生生活中での行事の企画や運営を積極的に行っています。

今年から新しく学生全体のマナー向上を目的とした活動を行ってきました。駐車場・サークル室・バスの利用状況を把握するため、見回りを実施し、対策を話し合い、利用状況の改善傾向が見られています。今後も、マナー向上を目的とした活動を行い、過ごしやすい大学の環境作りにも取り組んでいきたいと考えています。



第8回 国際フォーラムを開催しました



テーマ:「DNP: Doctor of Nursing Practiceの役割 - Nurse Practitionerの視点から -」

日 時: 令和元年7月14日(日) 14:00-16:45

場 所: 日本赤十字九州国際看護大学 講義室103

講 師: Dr. Miki Miura

参加者: 64名

NP(Nurse Practitioner)

Nurse Practitionerは、Advance Practice Registered Nurse(上級看護師)の1つで、主にアメリカ合衆国においてみられる看護職関連の資格です。登録看護師(registered nurse : RN)として臨床での実務経験を積んだあと、専門職大学院で必要な学位を取得し、所定の試験に合格することで得ることができます。また、NPは、診断や治療を行うことができます。DNPは、NP資格の博士学位(doctor)を示します。NP資格保持者は、アメリカ合衆国の看護職者(RN)の8パーセント程度だといわれています。

令和元年7月14日(日)、オープンキャンパスにあわせて、第8回国際フォーラムを開催しました。

本年度は、現在アメリカ合衆国ハワイ州でDNPでありNP(Nurse Practitioner)として活躍しているDr. Miki Miuraを講師としてお招きし、「DNP: Doctor of Nursing Practiceの役割- Nurse Practitionerの視点から -」というテーマで講演をしていただきました。

ミウラ博士(Dr. Miura)は、日本でもなじみがあるハワイのオアフ島でナース・プラクティショナー(Nursing Practice:NP)として長年勤務するかたわら、大学院での研究も遂行しNPの最高学位であるDNPを授与されました。

講演は、大きく分けて2部構成となっており、前半ではアメリカ合衆国でのNPの役割を、後半では看護教育および臨床の現場でのDNPと学術系の博士学位PhD(Philosophiae Doctor)の関係がテーマとなっていました。

午前中は降雨のため足元も悪かったのですが、九州各県からはもちろん、中国四国地方、そして沖縄からも参加して下さっていました。ミウラ博士(Dr. Miura)の実務家としての経験、そして学識に裏付けられたエネルギッシュな講演に、参加した皆さんは多くのことを学び、看護の奥の深さ、さらには日本での将来の可能性などを改めて考えるきっかけを感じたようでした。



講演中は携帯アプリを利用したクイズを行いました

ひとりを看る目、その目を世界へ

本学のスローガンである「ひとりを看る目、その目を世界へ」とはどのような意味を持つのか、学生ひとりひとりが考えるきっかけとなるコーナーです。

今号のテーマ

赤十字の看護師として世界に出ていくということとは

【国際活動実績】

◎2004年2月～3月 イラン南東部地震救援

基礎保健ERU第1班の追加要員として、外傷を負った多くの被災者に対応するため派遣される。(当時は、手術室勤務であった。) クリニックまで来られない人のために、避難民キャンプの中にサブクリニックを開設し、運営や現地スタッフの指導を行う。

◎2005年10月～12月 パキスタン北部地震救援

入院が必要な患者を診ていくための病院型ユニット(野外テント病院)設置のため、派遣される。現地の病院の敷地内にテントを設置する予定であったが、すでに100人以上のけが人が病院外で過ごしており、到着当日から患者が入院できるように支援するとともに手術室の立ち上げや運営を行う。

◎2011年8月～2012年1月 ハイチ大地震被災者支援

コミュニティヘルス要員として派遣される。14地区でコミュニティヘルスに関する授業での支援を行う。発災から2年後であり、中長期の支援に携わる。

◎2017年11月～2018年1月 バングラデシュ南部避難民救援事業

出産を経て、子どもが5歳になったのをきっかけに派遣に行くことを決める。避難民は劣悪な環境で生活しており、基礎保健の手当てを多く実施する。また、多くは公的サービスを受けられなかった人であったため、そのような人々を救うための活動を行う。

就職してから派遣されるまで

赤十字で派遣される時は、自身の職務において一人前の仕事ができることが求められます。英語ができて、就職してすぐに派遣されることはありません。独りでの派遣もあるため、自分で現場を見て、看護師として何が必要かを考え、行動に移せる力がないと派遣は難しいと思います。まずは、自己研鑽が必要です。

私は、看護師になって8年目で派遣されましたが、もっと早い段階で行かれる場合でも、病棟の日勤のリーダー(リーダー看護師)や後輩・学生指導(現地の赤十字・赤新月社スタッフの理解力を把握しながら、指導する力が重要なため)の経験を持ってから派遣されることをお勧めします。やはり、人に聞かないと動けないのでは、自分がつらい思いをすることになると思います。

また、家族などの身近な方の協力や所属している病院の理解も必要になります。



福岡赤十字病院
看護係長
橋本 香織さん

モチベーションの維持のためには

自己研鑽をする間、モチベーションを維持していくのは、かなりつらいと思います。現在は、研修生としての派遣や国際派遣要員のための研修もたくさんあり、短期で体験ができますし、いろいろな方の派遣経験を聞くこともできます。そのようなことからでも学びを深めていき、日ごろの看護師業務の中でも自分を高めていけるように考えていくことができればよいと思います。福岡赤十字病院では、国際派遣を希望する看護師のために勉強会やお互いに話す場を設けていますよ。

今のうちにやっておくとよいことは

いろいろなことを体験しておくこと。いろいろな人と交流したり、どんな状況でも楽しめるようにたくさんの方に挑戦したりしてほしいです。苦手なことにも少し挑戦しておくこともお勧めします。日本では苦しいことから手を引くことができますが、海外では逃げるできない場合もあって、そんな時に頑張れる力をつけておくとうよいと思います。

それから、英語だけではなく、ほかの言語を身につけておくのもよいかもしれません。

学生のみなさんへメッセージ

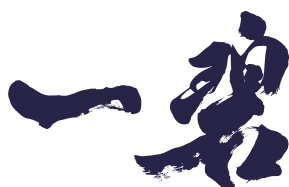
赤十字に関する講義を受けていることをもっと誇りに思って、理解を深めてみてください。就職してきてレポートを書かせると、赤十字の基本7原則がよく分かっていないんだと思う方がたくさんいます。7原則には大事な要素が隠れていて、国外に出ない看護師でも赤十字病院に就職するのであれば、日ごろから考えていくと解決することもたくさんあります。国内災害が起こり誰を助けたらよいのかを考えるときにも必要となります。理解するための時間がたくさんあるのも、多くの資料を目にすることができるのも学生のうちです。赤十字の授業を大切に受けるよう心がけてみてください!



第18回 遥碧祭 11月3日(日) 10:00~18:00



様々な催しを企画しておりますので、保護者、卒業生、地域の皆様の来学を心よりお待ちしております!!
*本学が所在するむなかたりサーチパーク主催のアステイ祭も同日に開催されます。
毎年ご好評いただいております本学の「健康応援コーナー」も実施いたしますので、お楽しみに!!



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになって一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。

「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：吉田 歩さん（平成26年度 看護学部卒業生）／福岡県・柏陵高校出身

 **日本赤十字九州国際看護大学**
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行：日本赤十字九州国際看護大学 企画情報室

〒811-4157 福岡県宗像市アステイ1丁目1番地
Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

<https://www.jrckicn.ac.jp/>

寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。